

## 業績説明書

畑野 快（大阪公立大学 国際基幹教育機構／現代システム科学研究科）

### 主要業績 1（論文 15）

**Hatano, K.**, Luyckx, K., Hihara, S., Sugimura, K., & Becht, I, A. (2022). Daily identity processes and emotions in young adulthood: A five-day daily-diary method. *Journal of Youth and Adolescence*, 51(9), 1815-1828. <https://doi.org/10.1007/s10964-022-01629-x>

アイデンティティと精神的健康の関係は数年をかけた長期的、全体的なレベルで検討されてきたが、短期的、日常的なレベルでの両者の関係は明らかでない。本研究では、若年成人 721 名を対象として 5 日間の日誌法を行い、日常レベルのアイデンティティ尺度を開発し、日常レベルの人生満足感、幸福感および抑うつ気分との関係を検討した。潜在プロファイル分析、多項ロジスティック回帰分析を行った結果、(1) 5つのアイデンティティ・プロファイルが見出され、特にモラトリアムの若者の割合が多いこと、(2) 日常レベルでコミットメントを強く感じている若者は人生満足感、幸福感が高く、抑うつ気分が低い一方で、日常的にアイデンティティを探求している若者は、逆の傾向を示すことを明らかにした。(324 字)

### 主要業績 2（論文 13）

**Hatano, K.**, Hihara, S., Nakama, R., Tsuzuki, M., Mizokami, S., & Sugimura, K. (2022). Trajectories in sense of identity and relationship with life satisfaction during adolescence and young adulthood. *Developmental Psychology*, 58(5), 977–989. <https://doi.org/10.1037/dev0001326>

青年期から成人期にかけてアイデンティティの感覚がどのように発達し、人生満足感と共変するのかは明らかでない。本研究では 4 つの年齢群（青年期前期・中期・後期、成人前期）を設定し、1 年に 1 度の縦断調査を 3 年間実施した。潜在成長モデリング（LGM）による分析を行ったところ、青年期前期から中期にかけてはアイデンティティが漸進的に変化する一方で、青年期後期以降は逆の傾向を示し、それらの変化は人生満足感と正負に共変していた。潜在クラス成長分析および MANOVA を行ったところ、アイデンティティが明確な若者ほど人生満足感が高いことが示された。これらの知見は、日本の青年のアイデンティティの混乱は 18 歳以降に本格化し、その変化は人生満足感と強く関連する可能性を強く示唆した。(323 字)

### 主要業績 3 (論文 10)

**Hatano, K.**, Sugimura, K., & Luyckx, K. (2020). Do identity processes and psychosocial problems intertwine with each other? Testing the directionality of between- and within-person associations. *Journal of Youth & Adolescence*, 49(2), 467-478. <https://doi.org/10.1007/s10964-019-01182-0>

アイデンティティと心理的問題は、双方向に関連するが、その検討は個人間レベルでの検討に留まっており、個人内での変化での関連は明らかでない。そこで、本研究では、3時点での縦断調査データを用いて（調査期間は1年間）、アイデンティティと心理的問題との因果の方向性を、個人間、個人内レベルで検討した。交差遅延効果モデルによる分析は、個人間のレベルで、心理的な問題がアイデンティティを予測した。ランダム切片交差遅延効果モデルによる分析は、個人内のレベルでアイデンティティが心理的問題を予測した。これらの知見は、アイデンティティと心理的問題の因果の方向性は、個人間、個人内レベルで異なる可能性を示唆する。最後に、個人内・間レベルに沿ったアイデンティティ支援の方策について議論した。(333字)

### 主要業績 4 (論文 9)

**Hatano, K.**, Sugimura, K., Crocetti, E., & Meeus, W. (2020). Diverse-and-dynamic pathways in educational and interpersonal identity formation during adolescence: longitudinal links with psychosocial functioning. *Child Development*, 91(4), 1203-1218. <https://doi.org/10.1111/cdev.13301>

青年のアイデンティティは、職業・教育・対人関係など様々な領域でも発達するが、各領域に沿ったアイデンティティの発達の軌跡は解明されていない。本研究では、青年 968 名に対して4年間の縦断調査を実施し（時点間隔は1年）、教育、対人関係領域におけるアイデンティティの発達の軌跡及び、その発達の軌跡と主観的 well-being、心理的問題との関連を検討した。領域ごとに潜在クラス成長分析を行ったところ、それぞれ5クラスが同定された。潜在変化モデルを用いた検討から、これらのクラスは主観的 well-being、心理的問題と正負に関連することが示された。これらの結果は、青年のアイデンティティ発達は領域によって多様であり、その多様さは精神的健康と共変する可能性を示唆していた。(311字)

## 主要業績5（論文7）

**Hatano, K.**, Sugimura, K., & Schwartz, S. (2018). Longitudinal links between identity consolidation and psychosocial problems in adolescence: Using bi-factor latent change and cross-lagged effect models. *Journal of Youth and Adolescence*, 47(4), 717-730. <https://doi.org/10.1007/s10964-017-0785-2>

Erikson によると、アイデンティティの感覚は、自己の一貫性の感覚を表す統合、非一貫性の感覚を表す混乱、そして両者が混在する統合体（consolidation）からなる。これまで、大半の研究が、統合か混乱のいずれか一方に着目してきたことに対し、本研究では両因子モデルを適用することでアイデンティティの統合体を測定し、かつ心理的問題との関連を縦断的に検討した。潜在変化モデルを用いた分析からは、統合体の感覚が心理的な問題と有意な負の共変関係にあること、交差遅延効果モデルを用いた分析からは、心理的問題が統合体の感覚を個人間のレベルで予測することを示した。これらの結果は、心理的問題を維持・増進する上でアイデンティティの統合体が重要な役割を果たすことを示唆していた。（314 字）